〔狐話〕

その二

ある家のおばあちゃんが、実家へ行っての帰りに、近道だからと山道を通って帰って来た。ところが顔の形相がすっかり変っており、あらぬことを口ばしるようになった。これはきっと途中の山道できつねにつかれたと悟った夫のおじいちゃんは、

「ばばあさ　きつねついだ。仕度さねばね」

といって、桟俵に油揚をのせたものを二つ作って、おばあちゃんの前に置いた。

「さあ　こうして作ったぞ、こっちへ来い」と言って、おじいちゃんは家の外へ出た。その後を嫁さんは箒ではき出す仕種をした。きつねのついたおばあちゃんは、土手にのぼろうとしたりして、中々素直には歩けない。おじいちゃんが、

「そっちは道でねえよ」

と言うと、

「こっち道だ」

と言って藪に入ろうとするなど大変だった。

やっとのことで墓地まで着くころには、きつねが離れていたという。